

放送メディア特性との関連

光 永 一 三

熊本放送に於ける“放送による熊本大学公開講座”の昭和55年放送開始以来の歩みを、その年度ごとに出された反省点と成果をもとに、ふり返ってみたい。

1. 放送による熊本大学公開講座 8年の歩み

55年度 1. 準備時間の不足

2. 対象の不明確

3. 大学講義のひきうつし

4. スタジオ聴講生制（ラジオ）

56年度 1. 準備、前年より1ヶ月早く行う。

2. 対象の不明確テーマでしぼる。（ラジオ）

3. 全学的取組みで間口広がり過ぎ（テレビ）

4. 講師・メディアの違いにとまどい。

5. 実験主体のテーマ決め（テレビ）

6. エリア内の取材で視覚的興味（テレビ）

7. 学術専門家と映像専門家の協力体制円滑に（テレビ）

57年度 1. $\frac{1}{2}$ VTR, $\frac{3}{4}$ ENG, 1吋VTR等, 新しいハードが加わり, 取材と制作に威力を発揮（テレビ）

2. 制作者に2年の蓄積

3. 専門用語のいい直しに苦勞（テレビ）

4. 印刷教材との関わり問われる。

5. 大学と局の連携, よりスムーズに。

6. 朗読等により、メディア特性を強調（ラジオ）
- 58年度
1. 授・受両側に4年目の予準知識増し、熱入る。
 2. ローカル色に工夫・薬草の現地取材（テレビ）
 3. スクーリングを中継・番組に挿入（テレビ）
 4. 実利性と学問性・講師側と受講側に期待のギャップ多少
 5. 受講者に自主グループ化の動き（ラジオ）
- 59年度
1. 9月～11月放送へ（テレビ）
 2. 映像化に講師側の協力（テレビ）
 3. 他局の番組研究
 4. コーヒーブレイク不評（ラジオ）
- 60年度
1. 金曜の朝9時半に放送時間変更、好評（テレビ）
 2. 全学的な広がりで日程遅れ気味（テレビ）
 3. 講座終了後、局の自主講座（ラジオ）
- 61年度
1. 受講生の増加（スクーリングの回数増で）
 2. 時宣に合ったテーマで反響多し（テレビ）
 3. 国内・取材・中継多用（テレビ）
 4. 主任講師・毎回出演（テレビ）
 5. 講座に登場の現地、番組制作前に、講師・アナウンサー・ディレクターで下見（ラジオ）
- 62年度
1. 実利テーマの選定で、受講者層若返る。
 2. 他大学の講師も入ってテーマ広範囲にカバー（テレビ）
 3. コンピューターグラフィックなどニューメディア登場（テレビ）
 4. テキスト、講座以外でも人気（ラジオ）
 5. シンポジウムに備え、別枠にて番組制作（テレビ）



ラジオ・スタジオ収録風景

2. 8年間の成果

(1) 受講者のレベル

公開講座の開始当初、各講師から異口同音に聞かれた言葉として、受講者の質の不明確さがあった。

平常の大学の講義においては、勿論、それぞれに、ある一定の選抜試験を経て入学、在籍している学生を対象、即ち一定基準の学力を有する者を対象としているため、その理解度においては、一つのレベルを想定出来るが、一般視聴者を対象とする公開講座にあっては、その対象は千差万別、理解度においても、可成りの格差が予想される。

そこで、講師側にとっては、どこを基準に講義をしていいのか迷うとの言葉になったわけである。

この点は、制度としては、大学の受講案内等において、高校卒程度の学力を有する者を受講資格としており、これを一応の目安とし、又、スクーリング等において、直接、受講者と講師陣とが対面する機会を多くすることによって、講師側が、受講者の理解度を認識することにより、その不安が全くとまではいかなくとも、解消された。

その他、講座一回ごとに、受講申し込み者から、その日の講座についてのアンケートを取り、この中に、当日の講座の理解度の判定の尺度となる設問等を含めておき、後日、それを当該講師に検討してもらうことにより、理解の度合を見らるということの繰り返しで、次第に受講者の質に対する講師側の不安は消えて行った。

(2) 成果の判定と受講の持続

前項は受講者の質の認識ということから、講師側からの成果の判定を述べたが、この項では、受講者側の欲求としての成果の判定の必要性について述べてみたい。

ある目的をもって、一つの物事に挑戦する場合、その行動がどのような成果を納めつつあるかを知りたいという欲求は、誰れしも、もつものである。特にその行動が積極的なものであればあるほど、その気持ちは強い。

特に、大学公開講座という、高度な学問的領域にチャレンジしようという、積極的な受講者の場合、この傾向は強くなるのは当然で、熊本大学では、前項のように、講座一回ごとにアンケートを行い、理解度をチェック、講座の最終には、修了証として、一枚の証状を渡されていた。この証状を手にした年配の受講者のよろこびにあふれた、誇らし気な表情を忘れることが出来ない。

この成果の判定は、実に、別の好結果も生み出す。

いかに熱意に燃えて積極的に受講しようとしている者でも、全く自主的な行動である限り、日常生活の様々な環境の中で、決心がにぶり、熱意が冷えてくることは予想に難くない。特に、それが個人の行動である場合はなおさらで、その際に目に見える形で学習の成果が判定され、評価され、形としての修了証まで渡されることは、何にも増しての励ましであり、やり甲斐といえる。

このことによって、受講が中断されたり、放棄されることなく、永く継続されることとなるのである。

(3) 個人視聴と集団視聴

受講の方法に、個人視聴と集団視聴の二つがあると考える。

勿論、放送の基本的形態としては、その特性から、場所を選ばず、個人の希望する所で視聴出来ることは云うまでもない。

特に、最近のハード面の発達から、持ち運びの困難であった視覚メディア・テレビにおいてさえ、携帯可能な受信機が出来つつある。

従って、あくまで個人視聴が中心であるべき放送メディアが、こと、この公開講座に関しては、集団視聴という違った側面を設えつつあるのはいかなる理由だろうか。

これは、前項でも述べた受講の持続性に関して、個人視聴より集団視聴の方が効果的であるという点からである。

熊本放送ラジオの公開講座の例であるが、同講座では、集団視聴とは少し異なるが、スタジオ公開で講座の収録を行っている。このスタジオ聴講生に講座開始以来、毎年応募してくるグループがあり、この人々が実に熱心に継続的に受講している。

又、このグループから派生した集団が、自主的に講座終了後も集まり、大学の講師に個人的に依頼して、自分達だけの講座を開いたり（昭和58年度実施報告書より）、放送の同録をとって、グループが集まり勉強会を開く（昭和56年度実施報告書より）など集団視聴の例は多い。

こうした集団視聴中の人々に聞くと、個人での視聴より集団でのそれがはるかに継続性が保てるといふ。更に、理解度の点でも、お互に疑問点を投げかけあい、話し合うことで理解が助けられ、この点でも、高度な内容の講座を持続的に受講される大きな要因になっているというのである。

この場合、集団視聴の隘路の一つになっていることに、著作権の問題がある。

集団視聴も、放送時に集団で視聴する場合は問題とはならないが、集団の便宜上、又は、集合の都合などから、放送時に集まれずに、録音・画を行って、

事後に視聴する場合は問題が生じる。

この事は、ひとり放送による大学公開講座だけでなく、一般に社会教育等に放送を利用する時に、留意しなければならないことである。

制度的に、この対応が考慮される事が可能であれば、放送の社会学習に利用される度合は、一段と飛躍的に増加すると考えられる。

制度的といわず、制作面でも、積極的に著作権の処理を行って便宜を計ることも必要であろう。

3. 放送的特性と大学公開講座

(1) 放送の瞬間性

放送の瞬間性は、電波というメディア上、仕方のないことであり、この特性から、著作権法上も、著作物の固定も一時的な固定として特例の扱いを受けている位、一時的、瞬間的である。

このため、理論的な展開を行う大学講座には、特に、計数的な論理には不向きであるといえる。

音声メディアのラジオに比べ、映像メディアのテレビでは、グラフや図表等を示されるといいうくらかの利点はあるにしても、表出されるものが瞬時に消失してしまうという点において、又、受講者が、もう一度反復して視聴し習得しようと考えても、不可能であることには変わりはない。

このことは、印刷教材が、受講者自身が納得のゆくまで反復して読み返し、見返して学習出来るのとは、大きな違いであり、又、教室で教官の講義を受ける場合も、教官の声は同じように瞬間に消えていくが、板書されたものは、可成りの時間、受講者の眼前に残り、それをノートに記録出来、更に、印刷教材は手元にあり、そして更に、尚、理解出来ない場合、質問を行って補い、理解を深めることが可能な点と比べると大きな差がある。

放送の場合、このほとんどが不可能である。勿論、最近のホームビデオの普及は、これらのいくらかは解消はしているが、全てが解決されたとは云えない。

こうした放送メディアの欠点とも云える特性を前提にしないで講座を行うと、

大変な間違いを犯すことになる。

講座の開始当初は、大学公開講座ということにのみとらわれて、大学の講義の引き写しを放送でという考え方から、講師がスタジオで独り、マイクや、カメラに向かって、仮想した受講者に、大学の教室で行う講義そのままに講義を行っていたといった今では考えられない誤りを行っていた。

(2) 現実性と論理性

前項で述べた通り、瞬間性・非反復性から放送の特性として、論理的・数理的な展開は不得手であるが、事物の如実な再現が可能なことから、放送は現実性に富んだメディアといえる。

そのことは、現実のままの体験は出来なくとも、それに近い擬似体験が可能で、あたかも、その現実の場にあるが如き感覚をもつことが出来るのである。

これによって、事象の理解を助けられ、理論的な展開がなくとも、直観的に了解が出来るのである。

豊かな再現性は、更に進んで、時間の凝縮や、拡大が可能で、肉眼では実感として捕えがたい長時間に及ぶ事象の変化を、短時間に圧縮して再現することで、明確に物の変化を認識することが出来るし、又、瞬時に変化する高速度の物の変化を、肉眼の知覚に耐えられるように、時間を拡大して再現することも可能であり、このことは、いかに才能豊かな教官が、百万の言葉、筆を費やして行う説明よりも、物事の真理を的確に、明瞭に伝え、説明出来るのである。

ここに、放送メディアの現実性があり、論理性に劣る特性を補って余りある長所がある。

(3) 動機づけと継続性

学問の道を志す時、その動機は様々であるが、動機となる事柄の刺戟が大きければ大きいほど、その志しは堅く、強いものとなる。

放送による事象の説明は、論理的な展開は不得手としながらも、経過する事象を捕え、ある時は、時間を停止して見せることで、その事象の本質に迫り、又、ある時は時間を延ばして示すことで、今まで目にし、耳にすることの出来なかったこの世の中の現象を詳細に示すことが出来る。

このことは、我々のまわりに起る事象の不可思議さをより強調し、強いインパクトで我々に対して、学問への興味を起させるのである。

このインパクトの強さが、学問への欲求を強め、より高度なものへと興味を促し、継続的な研究の道を歩ませる動機となりうるのである。

小さな驚きがより強い興味へ、それが更に、より高度な疑問へとつながり、発展的な研究の道へと昇っていくのである。

(4) 普遍性と限定性

放送の電波は、エリアの隅々まで別け隔てなく届く、受信機さえあれば、誰にでも視聴出来る。只、誰にでも簡単に視聴出来るだけに、簡単に視聴を拒否することも出来る。

普遍性があり、限定的であるという所以である。

それだけに、番組作りにあっては、視聴者を捕える方法を構じながら当らなければならない。

特に、大学公開講座においては、内容が高度に難解なものが多いだけに、その制作については余程の配慮がなければならない。

勿論、学究に興味がある者のみが視聴すればいいと割り切ってしまうと別であるが、放送の公共性からいっても、一部の視聴者のみを対象とすることは許されないことでもあり、視聴可能な人々により多く視聴してもらうための努力はつくさなければならない。

そのためには、視聴者の共感を呼ぶ作り方をしなければならないことはいうまでもない、だからといって、学問のレベルを下げて低俗におもねるということではない。

驚きを与え、共感を得ることで学問に対する興味を促し、番組への注目を集めて、次第に学究への道へと到達してもらうのである。

この普遍性を求めることは、一般性を追求する余り、大学の講義の中でこの番組を利用する場合、不向きなものになるのでは、との疑問が起るが、この点は我々制作者側が、大学の講義内容にまで立ち入ることのない立場にあり、一方的に“ 充分使えますよ” と云うことは出来ないが、敢えて云わせて載ければ、

その懸念は不要ではないかということである。

放送メディアで再現するものは、全て、学問的基盤の上に立った、物事の真理であり、研究成果の具現であるから、何ら真理にもとるところではない。

但し、表現方法に一部、一般性をもたせるため、講義としてのペースから考えると、不向きの部分があることも考えられるが、それは、講義全体の中で工夫され、解決されうる程度のものと考ええる。

例えば、アメリカの公共放送、PBSの例として、一般放送に使った大学講座を、大学では、講義に使う際、ナレーション部分を外し、映像部分のみを使い、説明は大学の講義担当の講師が直接、その場でナマで行うといったこともあると聞く（放送教育開発センター、阿部研究開発部長談）、こうした使い方も一方法で、わが国において、放送公開講座を大学講義に用いるとすれば、参考になる方法ではなかろうか。

以上のようなことで普遍的・一般的である放送公開講座を、大学教育という限定された範囲・対象に用いることが可能であるという二面性を充分にもち得ると考える。

4. まとめに代えて

以上、わが社における大学公開講座の制作・放送の8年間の経過と、反省をもとに、大学公開講座のあり方を考えてきたが、具体的には、映像化され、構成された番組の比較検討を、放送教育開発センター、熊本大学・民間放送教育協会のご指導ご協力のもとに、一般視聴者・大学学生を対象に行い、その理解度、印象度を計数的に算出する調査研究を行って載き、来年2月に行われる放送利用の大学公開講座シンポジウムで発表されることになっている。

それによって、より具体的な形で本稿の裏付けを行いたいと考える次第である。